2007 年度　立命館学校教育研究会　総会･分科会

2007 年 12 月 16 日（日）に、約 100 名の校友教員や教育関係の方々にご参加頂き、2007 年度立命館学校教育研究会総会・分科会を開催致しました。今回は、当日の模様をお伝えいたします。

オープニング企画
オープニング企画として、文学部を中心とした教職課程を履修中の学生１１組による、ポスターセッションを行いました。多くの方に熱意溢れる学生の発表に耳を傾けて頂き、ご助言ご指導を頂きました。学生の発表テーマは次の通りでした。

・学校教育におけるコミュニケーション
・学校環境を生かした総合学習
・ユネスコ協同学校
・日本語教育 - 中学校における外国人児童・生徒に対する特別支援 -
・国際化と修学旅行
・本当にすべき進路指導とは？

・平和学習
・栄養教諭制度の理念と実際 - 二つの役割をもった食育のキーパーソン -
・忘れたくない日本の教師 - 大正自由主義時代の教育者　赤井米吉を再評価する -
・忘れたくない日本の教師 - 金沢嘉市「よく遊べ、よく学べ」 -
・忘れたくない日本の教師 - 岸本裕史「どの子も伸ばす教育実践」 -

いづれも優秀な 11 組でしたが、ご参加頂きました先生方のご意見や本学教員の審査の結果、「ユネスコ協同学校」と「本当にすべき進路指導とは？」を発表した二組に、優秀賞が授与されました。

立命館学校教育研究会総会
14 時より立命館大学衣笠キャンパス創思館カンファレンスルームにおいて、 2007 年度の総会を開催いたしました。以下、総会の様子をお伝えします。
立命館学校教育研究会運営委員の四方利明准教授の司会により、 2007 年度総会が始まりました。最初に、立命館学校教育研究会会長の﨑野隆教授より挨拶が行われ、引き続いて、運営委員の長野光孝衣笠教職支援センター主任より、 2007 年度の活動報告が行なわれました。﨑野会長より、 2008 年度の運営委員の提案があり、満場一致の拍手をもって承認されました。次に、 2008 年度の活動計画が、運営委員の入江嘉明 BKC 教職支援センター主任より提案され、総会出席者の拍手をもって確認されました。最後に、立命館大学の教職教育の現状について、立命館大学教職教育推進機構事務局長の勝村誠教授より報告があり、閉会の運びとなりました。
★ ２００７年度　立命館学校教育研究会年間活動報告 ★
１．　2007 年度の活動方針
（1）卒業生教員や本学教職希望学生および立命館教職員をはじめ、教育に関わろうとする者の交流、ネットワーク形成のための取組みを行ないます。
（2）教職を志す本学学生の力量向上に資する様々な取組みを行ないます。
（3）学校教育に関する研究会・講演会等を開催いたします。
（4）電子媒体を基本とした方法で、ニュースを発行いたします。
（5）その他、会員の皆様へ情報を随時発信いたします。

・年間活動報告について
月　全体の活動内容　運営委員会開催
4 月　　運営委員会
5 月
6 月 学校教育研究会ホームページ開設
　　メールマガジン発行

7 月 講演会開催　運営委員会
8 月 若手教員研究会
9 月
10 月　 運営委員会
11 月 メールマガジン発行
12 月 総会・研究会（分科会）
　　採用試験合格者懇談会　運営委員会
1 月
2 月 メールマガジン発行
3 月

１）講演会について
日時：2007 年 7 月 29 日（日）14 時～１６時（懇親会：16 時 30 分～）
会場：立命館大学　衣笠キャンパス　啓学館２５０号教室
講師：上野　ひろ美氏（奈良教育大学教授）
演題：「教職の専門性と授業研究」
参加者数：７２名
上野先生は教育における教師の指導性とその発揮の仕方の究明を研究の核とされ、今回は、上野先生のご研究と様々なご経験に裏付けされた理論を展開して頂き、「教職の専門性と授業研究」についてご講演頂きました。講演会後の質疑応答でも、活発な意見交換が行なわれ、参加された方々から、有意義な講演会であったとの感想が寄せられました。

２）若手教員懇談会
日時：2007 年 8 月 4 日（土）13 時～17 時
会場：立命館大学　朱雀キャンパス　１階　多目的室
参加者数：４５名
各校種から４名の方に実践報告をして頂きました。その後、校種別の分科会を開催し、現場で取り組まれている教育実践やいじめを含む諸問題について意見交換や報告等が行なわれました。活気に満ちた懇談会となりました。

３．学校教育研究会の会員登録について
（１）本学文学部の教員養成 GP「学校教育臨床研修プログラムによる教員養成」専用ホームページの会員登録をしていただいた方については、立命館学校教育研究会のホームページ・会員登録に移行させていただきたい旨を Web 及びハガキにてご連絡を致しました。その結果、新規登録者も含め、現在 920 名の方に会員登録を頂いています。

★ ２００８年度　立命館学校教育研究会年間活動計画 ★

１．　2008 年度の活動方針

（１）卒業生教員や本学教職希望学生および立命館教職員をはじめ、教育に関わろうとする者の交流、ネットワーク形成のための取組みを行ないます。

（２）教職を志す本学学生の力量向上に資する様々な取組みを行ないます。

（３）学校教育に関する研究会・講演会等を開催いたします。

（４）電子媒体を基本とした方法で、ニュースを発行いたします。

（５）その他、会員の皆様へ情報を随時発信いたします。

・年間活動計画について　（予定含む）

月　全体の活動内容　運営委員会開催

4 月　　運営委員会

5 月　メールマガジン発行

6 月　教員採用試験受験者と卒業生教員との懇談会

7 月　講演会開催　運営委員会

8 月　若手教員研究会

　　メールマガジン発行

9 月

10 月　　運営委員会

11 月　メールマガジン発行

12 月　総会・研究会（分科会）

　　採用試験合格者懇談会　運営委員会

1 月

2 月　メールマガジン発行

3 月

３．学校教育研究会のホームページの運用について

（１）講演会および各種イベントのご案内をさせていただきます。

（２）会員の皆様方に、情報交換や交流をして頂ける場として運営させていただきます。

（３）教職教育に関わる情報提供を随時させていただきます。

＜ 2008 年度　立命館学校教育研究会 運営委員（敬称略）　＞

会　長 崎野　隆 立命館大学教職支援センター　センター長

立命館大学教職教育推進機構　副機構長

副会長 七里　源一 滋賀県教育委員会
副会長 井上　政嗣 雲雀丘学園小学校　教諭
運営委員 村上　晃美 羽曳野市教育委員会　教育委員
運営委員 西山　隆史 京都市教育委員会　総合教育センター
運営委員 岡本　真一 神戸市立須磨高等学校　教頭
運営委員 玉川　博章 京都市立下鴨小学校　教諭
運営委員 築山　佳苗 岸和田市立岸城中学校　教諭
運営委員 文田　明良 立命館高等学校　教頭
運営委員 勝村　誠 立命館大学教学部　副部長
立命館大学教職教育推進機構　事務局長
（立命館大学政策科学部　教授）
運営委員 四方　利明 立命館大学教職課程教室
（立命館大学経済学部　准教授）
運営委員 長野　光孝 立命館大学教職支援センター（衣笠）　主任
運営委員 入江　嘉明 立命館大学教職支援センター（ＢＫＣ）　主任
運営委員 浅野　昭人 立命館大学教学部　次長
運営委員 植木　泰江 立命館大学教職教育課　課長
事務局　立命館大学教職教育課

※立命館大学より選出されている運営委員については、人事異動により任期内であっても交代することがあります 。
【立命館大学の教職教育の現状について】～勝村教授の報告より抜粋～
本日ご出席の皆様をはじめとする各関係の皆様には、教育実習７００名、学校インターンシップ９０名、学校ボランティア 180 名と、非常に多くの学生を受け入れて頂き、ご指導ご援助を頂いておりますことをお礼申し上げます。

立命館大学は、総合大学としての教員養成の特徴を活かして、それぞれの所属学部の高い専門性と広く深い教養、多様な経験を持ち、教職に対する強い熱意と使命感のゆえに、教職を職業選択する、そのような人材を育てたいと考えています。さらに、「平和と民主主義」を教学理念とする立命館で培った精神を発揮し、国際感覚・人権感覚を備えており、人としての生きる道、高い道徳性と倫理性を備え合わせた精神を持った学生を育てたい、そのような思いをもって教職員一同、教職教育の課題推進に取り組んでいます。

現在、4,000 名を超える学生が教職課程を履修しており、ここ 10 年で 1, 513 名の教員を輩出してまいりました。12 月現在の 2008 年度任用の教員採用試験結果は、現役・既卒を併せ延べ２２２名が判明しています。

2007 年４月に産業社会学部現代社会学科子ども社会専攻を開設しました。非常に優秀な小学校教員を目指す学生が集い、これまでの中等教員養成課程に加え初等教員養成としての厚みを増し、本学の教員養成は更なる飛躍を目指すところです。また、2008 年 4 月より、京都の８大学が連合し、京都教育大学を含む国立私立の枠を超えた「京都教育大学大学院連合教職実践研究科」に、本学出身の学生も在籍し研究を深めながら現職教員を目指します。

★立命館学校教育研究会　分科会★
立命館学校教育研究会総会後に、分科会を開催致しました。３つの分科会の内容をご紹介いたします。

＜第 1 分科会＞　学校と保護者の連携による教育力の向上　－社会科の実践から－
報告者： 三浦 清和氏 （木津川市立山城中教諭 教諭 ）

■１学校と家庭の「教育力」
授業アンケートによると、授業で見聞きしたことを家族に話している生徒が 80%以上いる。さらに、授業中紹介した本、映画など見たことがある生徒も多数いた。生徒にとって魅力的な授業をすれば、生徒はそのことを家庭で話す。家庭で、授業の話がしたくなるような面白い授業を実践することを通して保護者と信頼・連携を深め、家庭における「文化資本」（家族の教養、蔵書、日常経験など）の形成に関与し、学校・家庭双方の「教育力」を高めることできないか、と考えて取り組みをすすめている。
■２授業づくり
・ 教材は「指導書」に依存せず、資料を探しつくりだす。
・ 教科書を使いながら作業できるプリントの作成し、使用。(単なるドリルや穴埋め問題だけでなく、考えて記入する問題を必ず入れる。)
・ 生徒の固定観念を崩し、知的好奇心を揺さぶるような教材づくりを目指す。(専門の歴史学の成果や多様な体験を授業に活かす。)
■３実践例
・ 公民分野
:「模擬裁判」　ＤＶＤで、窃盗事件の裁判を視聴した後、ロールプレイの手法を用いて、生徒に裁判官、弁護人、被告人などを担当させて実際の裁判の流れを演じさせる。判決だけは生徒自身に考えさせ、クラスで判決について討論させた。 :「株式ゲーム」　班別対抗で 1000 万円の資金を運用させるゲーム。経済ニュースを毎日見て、銘柄の株価で一喜一憂。生徒は、自主的に経済状況を分析しょうとするようになった。
・ 歴史分野

：映画「もののけ姫」から時代背景を考え、日本列島の東西文化圏の違いや中世社会を学ばせた。（ex エミシとヤマト王権の戦い、一遍上人絵伝の風景など）
：風刺画や「滑稽新聞」挿絵を見て、板垣退助像「板垣死すとも自由は死せず」の一面的な人物評価を考えさせた。
■４研究・討論
・ 生徒の興味・関心や授業を面白くすることだけでなく、学問の成果を踏まえた知的な興味へと導いている優れた実践だ。
・ 楽しい優れた授業実践であるが、生徒に「先生の面白い話を聞かせてもらう」という受動的な姿勢を生み出していないか。
・ 教科書や指導書の扱いはどうしているか？　＜回答＞「教科書」は使って、ノート兼資料集となっているプリントを活用して授業している。

記録：運営委員　　長野 光孝

＜第２分科会＞　「学力向上への取り組み実践」　　―朝読書の取組みから―
報告者：山根 修氏（神戸市立神戸西高等学校教諭）

神戸西高校では、平成 15 年４月より毎朝 10 分間、全校生徒が一斉に本を読む「朝の読書」活動を行ってきた。５年目を迎えた現在、生徒たちは予想以上に真剣に取組み、特別指導件数が４分の１に減り、遅刻がほとんど無くなって朝の 10 分間は静寂の時間となるなど、目に見える形で落ち着いた雰囲気の学校へと変貌した。
本発表は、少しでも学校を良くしようという教師たちの思いとその背景、職員会議で提案するまでの仲間（危機感の共有者）作りと苦悩、その解決策、活動の「助走」から「離陸」「安定飛行」へ繋げる工夫を凝らした数々の取組みを、朝読新聞や生徒の感想文・生徒指導データなどの貴重な資料を織り交ぜながら紹介するなど、生徒と教師のダイナミズムを身近に感じ取ることができた中身の濃い発表であった。
「全校一斉に（全ての学年で）行う」・「10 分間でも毎朝続ける」・「読む本は何でもいい」・「本を読む事以外は何も求めない」などの「朝読書の４原則」（ハウツー）だけではなく、読書を続ける事により「人の（本の）言う事を聞いてみよう」という「受け取る力」や、本を選ぶ「選択する力」の大切さ、読書を通じ生活が安定化した生徒自らの気づきなど、朝の読書の具体的な方法・意義について述べられた。
「学力向上は、学習意欲の向上が肝要であり、学習意欲を向上させるためには学習の習慣化、学習習慣のシステムの構築が不可欠である。教師はそのシステムを動かす為の仕掛けづくりに汗を流すべきであり、例え生徒に反発されても、それが本当に生徒たちの為になるならやり通す。秩序や形（型）も時には必要。」このような発表者の熱い教育信念によって、次第に、生徒のみならず職員室の同僚の言動が変っていく様は、校種を問わず、これから教職

を目指す学生・院生、若手教師・中堅教員にとって、大変参考となった。
　発表後、多くの参加者から意見・質問が出され、もっともっと時間が欲しくなる分科会であった。

記録：運営委員　　岡本 真一

＜第 3 分科会＞　　特別支援教育の発展と課題　　― 京都市立総合支援学校の取組みから見えるもの ―
報告者： 朝野 浩氏（京都市立西総合支援学校校長）

　特別支援教育の理念は、「障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味をもっている」と語られている通りである。現在、障害種別を越え、また学校の枠をも越えた新しい地域教育のあり方を見直す段階にあり、京都市ではこのような教育のあり方について、全国に先駆けて研究・実践を行ってきた。
　平成 19 年度からは「総合支援学校」として、新しい学校組織や運営のあり方を再構築し、教育内容・授業の改善課題に取り組んでいる。それは、「克服・改善」を主眼とした教育のあり方から、すべての人は何らかの形で困難やつまずきを持っていることを前提にしたノーマライゼーション理念（「ともに」から「我々」へ）への移行という、教育の「場」の見直しでもあった。

　具体的には、「総合育成支援教育相談センター」を設け、地域型の総合支援学校の取り組みを、さらに地域ぐるみでの支援の取り組みに発展させること、また「サポート」（保護者を含めた生涯支援）、「カリキュラム」（障害種別にとらわれない教育内容）、「マネジメント」（内と外に向けた連携）の 3 つの視点を整理し、それらを担当する部署が相互に連携することによって「個別の包括支援プラン」を充実さることであった。

　そのための課題はまだ多くある。新たな地域作りのためには、学校が見えるようになること、学校での取り組みが家庭や地域でも連続性を持って行われることが必要である。また、教員が教えることの専門性を磨くこと、様々な生徒の躓きや困りに対応できる教育カリキュラムをコーディネートしていくことが求められており、更なる努力を続けたい。

　このような講演を受けて、参加者との意見交換を行った。長期にわたる育ちを支援するためには、学校、福祉、医療などに任せきりにしないで、これらと家庭が手をつなぎ、保護者

の負担を軽減する地域ぐるみの支援が大切であること。これまで障害をもった子どもたちに対して働きかけることばかり考えていたが、「できること」やよい面を理解することが大切だと知ったこと。教育改善には「教員の数」よりも、教員の役割（研修）や教育課程が大切であること。一人で抱えないで、みんなで話をして共有化することを大切にしたいこと、などの意見をいただいた。

記録：運営委員　　文田 明良

2008 年度も、講演会や分科会等の様々な企画を予定しております。併せて、電子媒体を中心として、メールマガジンを発行致します。本会ホームページ上での交流もあわせ、皆様のご参加、ご協力をよろしくお願い致します。
次回号では、 2008 年７月に開催予定の講演会のご案内を致します。
ご意見・ご感想等は、立命館大学教職教育課（ TEL ： 075 － 466-3420 ／ FAX ： 075 － 465 － 7861 ）までお寄せ下さい。